

ジェイムズ・ジョイスの「アラビー」

南谷 覺 正

外国文化第一研究室

A Reading of “Araby” by James Joyce

Akimasa MINAMITANI

World Civilizations

Faculty of Social and Information Studies, Gunma University

(Received Sept. 18, 1995)

Abstract

“Araby,” the third story in James Joyce’s *Dubliners*, is, in spite of the seemingly simple narrative, as multi-layered as the other stories. This essay is an attempt to find out, integrate and explicate those several important motifs that are implanted obscurely in the text, thereby shedding further light on the nature of Joycean epiphany in some of the most significant and challenging passages of the story.

—Will you love me in December, as you do in May...⁽¹⁾

「アラビー」は、『ダブリンの人々』の「子供時代」を扱った3部作の最後、執筆順序から言えば11番目に当たる、ジョイス23歳の1905年10月に完成された作品である。

主人公で語り手でもある「少年」が、叔父、叔母の家に住んでいて、両親を持たないか、あるいはそれに類する孤独な境遇が示唆されているという点、また名前が与えられていないという点で、「姉妹たち」「邂逅」と共通の設定がなされている。

「少年」が住んでいる North Richmond Street は、袋小路 (blind) で、その行き止まりの四角の地所には、2階建ての空家が建っている。通りに面した家々は、お互いに内部の慎しい (decent) 生活を意識しているかのよう、茶色の、“imperturbable” な顔を

向け合っている。「少年」の家の前の住人は神父で、その神父が死んだ後にそこに移り住んだものらしい。死んだ神父と言えば、「姉妹たち」の神父がすぐに想起されるが、「姉妹たち」には2人の姉妹が登場するのに対し、こちらでは、姉妹は1人しかいないことになっているので同一人物が想定されているわけではない。死んだ後暫く借り手がなく、空家のままになっていたことは、淀んだ空気がどの部屋にも重く垂れ籠めていることから察せられる。台所の裏の部屋には神父のものだった反古類がまだ散らかっていて、その中に混じって、3冊の湿って頁の反った紙表紙の本 — Walter Scottの *The Abbot*, *The Devout Communicant*, *The Memoirs of Vidocq* — があり、その中では最後のものが一番好きだったと、そしてそれは紙の色が黄色だったからだと「少年」は言っているが、それはよく指摘されるように、「少年」の頹廢、麻痺に対する嗜好を表していると解釈できよう。しかし、Don Giffordによれば、*The Memoirs of Vidocq* の中には“sexual mores of criminal types”が含まれており、アメリカで翻訳出版された時にはその部分は削除されたという⁹ことであれば、「少年」がそうした刺激的な内容に言及していないことは不自然で、却ってそうした頹廢的な内容に対する関心を糊塗するために紙の色を前面に出しているのではないかとも思われてくる。そしてそれにもまして重要なのは、この本が、死んだ神父の嗜好の一部をなしていたはずだということである。

中央に林檎の樹が生えている、エデンの園に擬せられているとおぼしき庭の、周囲の茂みの一つに、「少年」は自転車用の錆びた空気ポンプがころがっているのを見つける。この錆びたポンプは、生前、神父が、当時はまだ新しい乗り物であった自転車に乗っていたことを示していて、「姉妹たち」の“pneumatic wheels”を思い出させ、想像力を働かせれば、自転車に颯爽と乗っている在りし日の神父の得意気な様子さえ彷彿とさせる。しかし一陣の無常の風は神父を病床の人となし、ポンプはうち捨てられ錆びるにまかされた。あるいはその錆びは、「姉妹たち」の神父の悲劇的な「麻痺」に通ずる長い病床生活を暗示しているかもしれない。

季節は冬で、「少年」たちが夕食を急いで食べている間にも、黄昏は速やかに垂れ籠めてくる。夕食後、「少年」たちは通りに出て遊びを続ける。家々の茶色い顔は黒ずみ、屋根の線で区切られた空は、刻一刻とその色合いを変じる紫色の光を残し、通りの街灯の光が、その空に向かってランプを掲げるように弱々しい光を放っている。冷たい空気が「少年」たちを刺し、彼らは火照ってくるまで身体を動かして遊び、しんとした通りに子供たちの叫び声が響く。遊んでいるうちに、ふとしたなりゆきで家々の裏側の、暗い、ぬかるんだ小道に出て、“cottages”（貧しい人たちの住んでいる界限）の荒っぽい子供たちの襲撃を受けたり、暗い湿った裏庭の戸口に掘られた、臭気を立ち上らせている灰落とし穴(ashpit)にゆき当たったり、暗く、臭い馬小屋に紛れ込んで、そこで馬の毛を梳いたり、留め金のついた馬具を金属音を鳴らしながら運んでいる御者に出くわしたりした。表の通

りに戻ってみると、台所に点された灯りの光が、家々の地下出入口の辺りに溜まっていた。「少年」の叔父が角を曲がってくるのが見えると、「少年」たちは叔父が無事に家に入るまで影に隠れてやり過ごした。また Mangan の姉が戸口に出てきて、弟をお茶に呼び入れようと通りの左右に目をやるのを影に隠れて見つめていた。「少年」たちは、その「少女」が家に入るかそこに居続けるかを見守り、居続けた時は、諦めて戸口の階段のところまで出ていき、弟はいつも姉を擲う言葉を掛けながら入っていった。「少年」は、鉄柵のこちら側から「少女」の姿を見つめる。彼女が戸口に向かって体を回転させると、それに合わせて彼女の服が揺れ、彼女の後ろに編んだ柔らかな髪の rope が、右に、左に揺れた。

「少年」は毎日、正面の居間の日除け(blind)を下ろした下に腹ばいになって、床と日除けのわずかな隙間から「少女」の家の戸口を見つめた。「少女」が戸口に出てくると「少年」は心を躍らせ(“my heart leaped”)、ホールに飛び出し教科書をひつつかみ、「少女」の後を追った。視界の中に絶えず「少女」の茶色の姿を捉えながら歩き、2人の道が分岐する地点が近づくと、歩調を速めて「少女」を追い越した。それは毎朝繰り返されたが、「少年」が「少女」に話しかけるといことはなかった。しかし彼女の名前を想うと、「少年」の全身の愚かな血はその召命(summons)に応じるかのようであった。

「少女」の姿は、「少年」の行く先々に、およそロマンスに縁もゆかりもなさそうな場所にまで付き纏ってきた。毎週土曜日の夕方、「少年」は荷物を運ぶ手伝いをするために「叔母」について市場へ行かなければならなかった。

- (A) We walked through the flaring streets, jostled by drunken men and bargaining women, amid the curses of labourers, the shrill litanies of shop-boys who stood on guard by the barrels of pigs' cheeks, the nasal chanting of street-singers, who sang a *come-all-you* about O'Donovan Rossa, or a ballad about the troubles in our native land. These noises converged in a single sensation of life for me: I imagined that I bore my chalice safely through a throng of foes.⁽³⁾

この描写は、冒頭の North Richmond Street の描写と対照的に、生の猥雑さと喧騒に満ちている。しかしそれらの喧騒の中に、アイルランドの苦難を歌うもの悲しげな歌声が混じっていること、さらに、“litanies”(連禱)と“chalice”(聖杯)という、宗教的な隠喩が意識的に使用されていることが目を惹く。豚の頬肉を詰めた樽のそばで、頬肉が盗まれないように番をしている少年のように、「少年」は「少女」の映像を「聖杯」として、“sensation of life”をなす世界から守り抜こうとしている。

「少年」の唇には、自分でも意味の分からない不思議な祈りと讃歎の言葉に混じって

「少女」の名前が昇ってくるようになる。目には涙もなく涙が溢れ、心臓が破れてその中に詰まっていたものが胸一杯に洪水のように広がる思いをしたこともあった。将来のことはほとんど考えず、これから先「少女」に話しかけることがあるのかどうか分からなかったし、仮に話しかけたとしても、自分の混乱した崇敬(adoration)の気持ちを一体どう伝えればいいのか覚束なかった。「少年」は、「少女」の言葉や仕草にその弦を恣に掻き鳴らされる豎琴のようであった。

ある晩「少年」は、神父が死んだ奥の部屋に入っていった。それは暗い雨の晩で、家の中はひっそりとして何の物音もしなかった。

- (B) Through one of the broken panes I heard the rain impinge upon the earth, the fine incessant needles of water playing in the sodden beds. Some distant lamp or lighted window gleamed below me. I was thankful that I could see so little. All my senses seemed to desire to veil themselves and, feeling that I was about to slip from them, I pressed the palms of my hands together until they trembled, murmuring: *O love! O love!* many times.

ついに「少女」の方から「少年」に話しかけてきた。「少女」は「少年」に“Araby”には行くつもりかどうかと聞き、行けるものなら自分も行きたいのにと付け加えた。行けない理由を「少年」が尋ねると、その週には「静修」(retreat)があるからと「少女」は答えた。「少女」の弟と他の2人の少年たちは帽子取りの遊びに熱中していて、「少年」は鉄柵を隔てて「少女」と差し向かいであった。

- (C) She held one of the spikes, bowing her head towards me. The light from the lamp opposite our door caught the white curve of her neck, lit up her hair that rested there and, falling, lit up the hand upon the railing. It fell over one side of her dress and caught the white border of a petticoat, just visible as she stood at ease.

これは特に入念に書かれた文章に相違なく、短い中にも読者をも蠱惑してしまうような何ものかが顕現している。そしてそれに続く “It’s well for you.” – “If I go, I will bring you something.” という極めて短いやりとりも、「少年」の緊張の極みにある恍惚感、相手のためだったらどんなことでもするという気持ちが反射的に口をついて出たといった心理的機微を的確に表現している。

それ以降「少年」は、現在と“Araby”との間に横たわる時間をできれば抹殺してしまいたいような衝動を感じる。今や、本を読もうとしても、「少年」と頁との間に「少女」の姿が割り込んでくる。静寂はどこからともなく響いてくる“Araby”という言葉によって破られ、その音節の響きに「少年」の魂は逸楽を見出し、その東洋的な魅惑の虜となり果てる。学業には身が入らず、最初は愛敬として笑って見過ごしていた教師もその怠慢ぶりに次第に眉を顰めるようになる。「少年」の考えは取りとめがなくなり、忍耐心は失われ、自分と自分の欲望の間に入り込んでくる人生の真剣な営為は、醜悪で単調な児戯に類するものと思われるようにまでなった。

土曜日の朝（その日バザーに行く前もって了承を取ってあった）、「少年」は叔父にその晩バザーに行くことについて再度念を押した。帽子にかけるブラシを捜して騒ぎ立っていた叔父は、素っ気なく相槌を打った。叔父が玄関ホールにいるために、日除けの陰から「少女」が出てくるのを見ることも叶わず、「少年」は不機嫌にゆっくりと学校へ歩いていった。底冷えのする寒い日で、何となく悪い予感がした。

夕食時に帰宅すると、叔父はまだ帰ってきておらず、暫くの間見つめていた時計の音に我慢できなくなった「少年」は、階段を上り2階に上がった。

- (D) The high cold empty gloomy rooms liberated me and I went from room to room singing. From the front window I saw my companions playing below in the street. Their cries reached me weakened and indistinct and, leaning my forehead against the cool glass, I looked over at the dark house where she lived. I may have stood there for an hour, seeing nothing but the brown-clad figure cast by my imagination, touched discreetly by the lamplight at the curved neck, at the hand upon the railings and at the border below the dress.

階下に降りてみると、質屋の老いたやもめで、慈善行為のために使用済み切手を集めている冗舌な Mrs Mercer が来て暖炉の前に座っていた。「少年」は、叔母と Mrs Mercer の間で取り交わされる噂話を堪えて聞かねばならなかった。夕食の時間は1時間以上も延ばされたが、叔父はまだ帰らなかった。午後8時を過ぎると、Mrs Mercer は、夜の空気に当たると健康に悪くからもう帰らなくてはならないと言って帰っていった。彼女が出ていくと、少年は、拳を握り締めて部屋の中を行ったり来たりした。叔母は、バザー行きは今日は諦めてはどうかと言った。9時に、ドアの掛けがねを締める音、続いて叔父の独り言、外套を掛けられた外套掛けが揺れる音がした。「少年」はそれらの音が何を意味しているかを知っていた。

ひどく遅れて始まった夕食が半ばあたりにさしかかったころ、「少年」は叔父にバザーに行く金をもらえないかともち出してみた。叔父はバザーのことを忘れていた。“The people are in bed and after their first sleep now.”という叔父の言葉に「少年」は笑わなかった。叔母は熱心に (energetically)、ずいぶん待たせたのだから金を渡してやってはどうかと執り成す。すると叔父は忘れていたことを詫び、自分は“All work and no play makes Jack a dull boy.”という諺を信じている、ところでお前はどこへ行くと言ったのだったかなと言い、「少年」がもう一度バザーの名を繰り返すと、お前は“The Arab’s Farewell to his Steed”という詩を聞いたことがあるか、と聞いた — 「少年」が部屋を出る時、叔父はその詩の冒頭部を叔母に朗唱しようとしていた。

「少年」は1フロリン銀貨を手握り締めて、Buckingham Street を駅に向かった。買い物客で混雑した、ガス灯に照らされた通りを見て「少年」は自分が何をしに出かけてきたのかを思い出す。駅に着き、がらんとした三等客車の席に座り発車を待つ。汽車は発車時刻を耐え難いほど過ぎてからやっとのろのろと動き出し、廃墟のような家々の間を這うように進み、煌めく川を渡った。Westland Row Station では群衆が客車に乗り込もうとドアまで押し寄せてきたが、ポーターはこれはバザー行きの専用列車だといって押し止めた。「少年」は再び動き始めた誰もいない客車にぽつんと座っていた。それから数分後、汽車は臨時に設置された木のプラットフォームに着き、そこから道路に出た「少年」は、照明された時計の文字盤から時刻が10時10分前であることを知った。あの魔術的な名前を掲げた建物が正面に見えた。

6ペンス用の入口が見つからず、バザーが終わってしまうのではないかと心配した「少年」は、疲れた顔をした男に1シリングを渡し、回転木戸 (turnstile) をくぐった。中は大きなホールになっていて、壁の中ほどに観覧用のバルコニーがしつらえられていた。ほとんどの店はもう店仕舞っていて、ホールの大半は闇に包まれていた。礼拝の後に教会の中に広がるあの静寂がここをも領し始めていた。「少年」はおずおずとホールの中央に進み出る。まだ開いている店にまばらに人影があった。Café Chantant のイリュミネーションが点ったカーテンの下で2人の男が金盆の上で金を数えていて、その硬貨の落ちる音が聞こえていた。

自分が何をしにここへ来たのかを努力して思い出した「少年」は、一つの店に行って磁器の花瓶や花柄模様のティーセットを眺めた。戸口のところで1人の若い女性と2人の若い紳士が、イギリス風の accent で笑いながら話していた。

- (E) —O, I never said such a thing.
 —O, but you did!
 —O, but I didn't!

—Didn't she say that?

—Yes. I heard her.

—O, there's a ... fib!

その若い女性は「少年」のところにやって来て、何か買いたいものがあるのかと義務的口調で尋ねた。「少年」は、店の暗い入口の両脇に東洋の番兵のように立っている大きな壺に小さな視線を投げかけ、“No, thank you.” とつぶやく。若い女性は、一つの花瓶の位置を直してから2人の紳士のところへ戻って行き、そこで先程と同じ会話が始まった。女性は一度か二度肩越しに「少年」のほうに目をやった。

「少年」は、何にもならないことが分かっていたが、品物に関心があるように見せるために暫くそこに佇み、それからゆっくりとそこを離れ、ホールの中央を歩いて出口へ向かった。ポケットの中で握り締めていた手を緩めると、2枚の1ペニー硬貨が、ポケットの底の6ペンス硬貨の上に落ちていった。2階のバルコニーの端から消灯を告げる声がし、ホールの上半分は完全な闇に覆われた。

(F) Gazing up into the darkness I saw myself as a creature driven and derided by vanity; and my eyes burned with anguish and anger.

II

「アラビー」においても、「姉妹たち」や「邂逅」と共通のモチーフが展開されている。家々の茶色の外観、「少女」の茶色の服、「少年」の好んだ黄色の紙の本が、頹廢、麻痺を表わす色彩として機能していることは既に触れた。また、毎日繰り返される遊びの決まった process、「少女」が出てきて「少年」たちと繰り返す routine、毎日「少年」がブラインドの陰から「少女」を覗き、後を追ひ、決まった地点で彼女を追ひ抜く儀式 — これらは機械的な反復運動に陥っている麻痺の overt な症例として誰の目にも明らかであるが、その他の一見何気ない部分にも麻痺の影は忍び込んでいる。叔父が玄関に帰ってきた時、「少年」はその幾つかの兆候から — つまりそれは常習的なものであることになる — 叔父が、ジョイスの父と同じように、アイルランドの宿痾の一つ drunkenness に陥っていることを知る。“The people are in bed and after their first sleep now.” という叔父の言葉に対して「少年」は笑わなかったと言っているが、それは、叔父のこうした科白（十八番の科白であろう）に対して、通常は微笑んでいたことを暗示している。続いて発せられる“All work and no play makes Jack a dull boy.”も酔っては何度も繰り返してきた、恐らく何らかのjokeを含んだ叔父の得意の言葉なのであろう。

閉塞的な世界からの「逃避」についても、「少年」たちの遊びがその *mimic play* になっている点で、更にやがてその子供の遊びから離れて実際の「逃避」行動に出るという点で、またその逃避行がはかなくも挫折に終るという点で、特に「邂逅」と類似した構造になっている。「少年」たちの遊びにおける、“*rough tribes from the cottages*” や “*ashpits*” や “*dark odorous stables*” は、「姉妹たち」において「少年」の想像の先に待ち構えていたように現われる神父の像と同じく、冒険譚における主人公の行く手を遮る「怪物」の機能を果たしている。「少女」の腕に嵌められた銀の *bracelet*、「少女」がそこから先には出てこない「鉄柵」も、「少女」の縛られた境遇を効果的に表現している。学校の “*retreat*” によって行ってみたい “*Araby*” に行けない「少女」が、「少年」に “*Araby*” 行きを勧めるのも、自分の果たせない逃避の夢を「少年」に代行してもらおうとする試みとしてまず映じる。そうした、ダブリンの人々を呪縛する宗教的因習という視点で見れば、神父の読んでいた本や、自転車にも、生前の神父のささやかな逃避願望が読み取れるかもしれない。

「少年」がどういう訳でかは不明だが、父、母を奪われており、しかも叔父、叔母との暖かな心の交流にも恵まれていない孤独な境遇に生きているというのも、「子供時代」3部作に共通している。遊んでいて、叔父が角を曲がるのが見えると影に隠れること、土曜日の朝の叔父の素っ気ない受け答え、散々待たされたのにも拘らず、「少年」が食事の半ばまで “*Araby*” 行きの話を持ち出さなかったこと、またその後の叔父の「少年」を擲うような応答にも、叔父と「少年」との関係が十分に看取される。それほど冷淡でもなさそうに感じられる叔母についても、土曜の夕方は、市場に荷物を運ぶためについて行かなければならないことや、叔母と Mrs Mercer の会話を忍ばねばならなかったことを「少年」が語るその語り口に、「少年」が叔母の顔色を窺っているような遠慮が感じられる。叔父の帰りが遅い時も、「少年」のした不満の示威運動は、拳を握り締めて部屋を行ったり来たりすることであり、直接言葉にして叔母に訴えることは慎んでいる。また、叔父に対する叔母の執り成しにしても、注意深く読むと、それより前には “*I’m afraid you may put off your bazaar for this night of Our Lord.*” と、行くことを取り止めるように勧めているのだから、“*energetically*” に叔父を説得するのは奇妙な対照を成している。やはり叔母にとっても、「少年」は親身な愛情を注いでいる対象ではなく、時には厄介払いをしたくなるような存在にすぎないという印象が強い。このように家庭的な心の交流を絶たれた孤独な「少年」が、奇怪な人物と暗黙の *communion* を形成するというのが、前2作の大きな構図であった。それに対して「アラビー」においては、「少年」が心を寄せるのは女性であり、しかも一見したところでは、「姉妹たち」「邂逅」のグロテスクなまでの倒錯性は見当たらず、年長の少女に寄せる少年の思慕とその挫折を *realistic* に描いているだけのように見える。⁽⁴⁾しかし果たして、それほど簡明な作品であろうか。

III

「アラビー」独自の、意識的に採用されていると考えられる顕著なモチーフが幾つかあるので、まずそれらを指摘しておきたい。第1は「闇と光の対比」で、家々が黒ずむ冬の夕暮れの暗がりに対比して、空に残って一刻一刻その色合を変じながら揺蕩う紫色の光、街灯のまだ弱々しい光が配され、また他方では、子供たちが遊びの最中にふと紛れ込む世界には、“dark muddy lanes” “dark dripping gardens” “dark odorous stables” (Italics mine) が待ち構えていて、闇の領分の存在を主張している。裏の世界から表通りに戻ってみると、台所に灯された明りの光が地下出入口の辺りを照らしており、叔父や「少女」の姿が見えると「少年」たちが暗がりには隠れ、戸口に立つ「少女」に半分開けられたドアから漏れる光があたり、毎朝「少年」は閉ざした日除けの陰から明るい外を窺う。「少年」が神父の死んだ部屋に入っていった晩の暗さと窓の外に煌いて見えた一つの光。「少年」に話し掛けてきた時の「少女」の身体にあたっていた街灯の光、バザーに出掛けていく日に上っていった部屋の暗がり、窓の外に見える「少女」の家の暗い壁面、「少年」の想像の裡に現われる「少女」の姿に当たっていた光、フロリン銀貨を握って出ていった外の闇、ガス燈の光、暗がりの中に蹲るように建っている貧しい家並み、渡る川面の煌き、到着した駅で「少年」に時を知らせる時計盤の円形の光、バザーの会場に入った時に「少年」を襲う暗がり、Café Chantant のイルミネーション・ランプの光、ギャラリーの明りが消され上部を覆う深い闇、そして最後に、苦悩と怒りに燃えたった「少年」の目の光。

第2の「冷たさと熱の対比」も数は限られているが、要所で効果的に使用されている。季節的な設定は最初は冬になっていて、冷たい空気が「少年」たちを「刺し」、「少年」たちは身体が火照るまで遊んだこと、神父の死んだ部屋へ入っていった晩の雨の（言外に十分感じられる）冷たさ、バザーに行く日の朝の凍えるような（“pitilessly raw”）寒さ、「少年」が時間を潰しに上っていった部屋の冷たさ、「少年」が（熱を帯びていたに相違ない）額を押し当てた窓ガラスの冷たさ、そして階下に降りてきた時に燃えていた暖炉の熱。

そして第3に「静寂と音の対比」。North Richmond Street の静けさ、Christian Brothers' School から下校する学童たちの賑やかな声、冬の夕暮れの静かな通りに研する「少年」たちの遊びの叫び声、毎朝繰り返される「少年」の押し黙った登校の道行き、土曜の夕方の市場の喧騒、「少年」の修道士のような黙々とした様子、祈りの中に突然口を衝いて出る「少女」の名前、神父の死んだ部屋へ入っていった晩の物音一つしない静寂、ふと壊れた窓ガラスから聞こえてくる雨の音、「少年」の口を何度も衝いて出た “O love! O love!” という言葉、静寂の中からどこからともなく聞こえてくる “Araby” という言葉、叔父を待っている夕方の（そうであったに相違ない）静けさ、時計の音、上っていっ

た2階の静けさ、外からぼんやり聞こえてくる子供たちの声、降りてきた時に聞かされた叔母と Mrs Mercer のお喋り、そして、到着したバザーの会場の虚を衝くような静けさ (“a silence like that which pervades a church after a service”)、そして金属製の盆に落ちる硬貨の音。

「アラビー」では、こうした対比的モチーフが相互に絡まり合うように配置され、全体として極めて「感覚的」(sensual) な文章になっている。遊びの最中にさまよい込んだ裏庭や馬小屋の “odour” を含めれば、視覚、聴覚、嗅覚、触覚が働いている描写の比率の高さは、明らかにそれを意識して書かれた文章であることを示唆している。それは一つには、「少年」が “childhood” から “adolescence” の入口に差し掛かっているのが前提されているからであろう。「少年」という蕾は今やその原初的な柔らかな感覚の花弁をおおずおと外界に向かって開き始め、感覚与件はそれに激しく襲いかかり、内には蒸せるような花粉が準備され始めている — そうした precocious な子供にありがちな、精神に対する感覚の過剰による特異性が「アラビー」の「少年」には認められる。引用部(B) の箇所では「少年」は、感覚を抑制してくれる闇に感謝している。どの感覚器官も凶暴な刺激に耐えかねて、魂は感覚から離脱しようとしてさえている。感覚の上にかろうじて築かれた生の不安定さ、未成熟な性の衝動が方向も可能性も剥奪されたまま盲目的に宙を舞う挫折の予感が全体を覆っている。 — “It is everyman’s puberty rite, imperious desire blunting itself upon limitations, and fragmenting into an opposite despair.”⁽⁵⁾

一方に強い憧憬がありながら、自分の意志で自分の運命を開拓していくという能動性をいまだ具備していない実質の希薄な受動的な欲望が、第4のモチーフである「待つこと」を宿命的なものにしてしている。夕方の遊びで、叔父が姿を現すと影に隠れて待ち、「少女」が現れるとやはり影に隠れてその去就を見守り、毎朝「少女」が戸口に現れるのを待ち、彼女と話しをする機会を待ち焦がれ、“Araby” に行く土曜日を一日千秋の思いで待ち、土曜日の夕方叔父の帰りを待ちわび、時計を見つめて待ち、2階の部屋で待ち、下に降りて Mrs Mercer のお喋りの終わるのを待ち、叔父が帰ってくると食事が半ば済むまで話しかけるのを待ち、叔父の冷やかしが一段落するのを待ち、汽車の遅れを待ち、のろのろと出発するのを待ち、途中で停車するのを待ち、バザーの会場で買うつもりがないのに暫く待ってから立ち去る。

しかしながら、「少年」の「少女」に対する感情をもう少し綿密に吟味してみると、凡庸な作家のそれとは一線を画したジョイス的な意匠が浮かんでくる。「少女」の顔立ちが最初から最後まで言及されず、「少年」の恋の最初の clue として与えられているのが、彼女の編んだ髪と服が揺れたことだけということ一つを取ってみても尋常な「初恋」物語とは既に趣を異にしている。「少年」は日除けの陰から「少女」を覗き、後を追ひ、胸をときめかせながらすれ違ふという、甚だ男らしくない手段に訴えながらも、自分を市場と

いう俗世の真っ只中で chalice を守り抜く禁欲的な騎士になぞらえている。「少年」が自覚している「少女」は、Vittoria Colonna であり Laura であり Beatrice であり、そしてそれら chivalric love、Platonic love の愛の源泉に佇む聖母マリアである。口を衝いて出る不可解な祈りの言葉、涙、心臓が張り裂けそうな崇敬の想い — それらはいずれも疑似宗教的熱情、とりわけマリア崇拜の兆候を示している。そして、こうした「愛の技法」は、“my body was like a harp and her words and gestures were like fingers running upon the wires” というような、性的に逆転した、受動的な官能性と共謀している。

物語の大きな転換点となっている引用部(B)の、神父の死んだ部屋へ入っていった晩の雨が針のように、濡れそぼった花壇に貫き戯れている描写には、明白に sexual connotation が含まれており、「少年」の無意識下で蠢いている生理的衝動に対する精神的抵抗は限界に達し、薄い粘膜に包まれか細い神経に支えられただけの諸感覚は崩壊寸前の危機すら感じさせる。「少年」は手を合わせて震わせながら祈り、すると恰もその祈りが通じたかのような書きぶりで、「少女」のほうから「少年」に話しかけ、そして引用部(C)の「少女」の顕現に導かれている。鉄柵の spike の一つを握り、首を「少年」の方に曲げた「少女」に街灯の光が落ちかかり、うなじの白い曲線、そのうなじに憩う髪、手すりに置かれた白い手、スカートの腰の部分、そしてその下に覗いたペチコート白い縁取りが「少年」の眼前に浮かび上がる。この魅惑的な謎めいた像には、一体何が意図されているのであろうか。聖女、聖母のイメージは依然として存続し、「少年」のほうに頭をかがめた姿には、「少年」の手の届かない遠い気高い存在、tournament に出場する騎士に favour を与える貴婦人、そして受難の子を慈しむマリアの pietá の映像が重なり合い、「白」という色はその純潔さを表象している。また同時に、自分を因習の犠牲として捧げ、代わって「少年」に夢を与えようとするその姿には、特に、spike に手を貫かれ、首をうなだれるように傾げた姿からは、十字架に掛けられたイエスの像さえ浮かんでくる。しかしそればかりではないだろう。銀の bracelet をくるくると回転させ、美しい声で “Araby” と囁き、白い首のアーチ、美しく結った髪を見せながら、鉄の spike を握ったその姿には、美の妖しい力が、喩えて言えば、その美しい声、髪、銀をあしらった調度で Odysseus を籠絡し、その魔法の杖で豚に変えようと待ち構えていた Circe を思わせる、神話的と形容してよいような魔力が籠っているように感じられる。そして更には、安っぽいリングを弄び、鉄の spike を握り、下着を見せながら、街灯の光りの下に臃な姿を浮かべて佇む姿には、どこか娼婦を感じさせるものもないとは言い切れない。少なくとも下着は、「聖性」にとっては障害となるものを連想させずにはおかず、しかもそれが「少女」のしどけない姿勢の (“just visible as she stood at ease”) ために見えるものであれば一層、彼女の “chastity” を脆いものに思わしめるのである。「聖性」と「魔性」と「娼婦性」と

いう、互いに相克しながらもどこかで重なり合うような「女性」の本性がここに顕現させられている。

神々の覚えめでたき知将 Odysseus とは異なり、「少年」は完全にその魅力の虜となってしまう。寝ても覚めても “innumerable follies” に思い耽り、学業を疎かにし、“Araby” の響きに陶然とし、真面目な人間の営みが堪え難いほど児戯めいて感じられるようになる。恋の病の典型的な症例であるが、注意しなくてはならないのは、この時点で「少年」は、「少女」の「聖性」よりはむしろ後二者に依拠した悦楽に溺れ、そのために、以前の騎士的な毅然とした面を失っていること、そしてそれが “Araby” という、東洋的魅惑を秘めた音に集約され、阿片窟の懶惰を貪るようにそれに耽るうちに、いつしかそこに行くこと自体を恋の成就でもあるかのように自己目的化してしまっていることである。無論前述したように、その “Araby” 行きには、この閉塞的な世界からの逃避願望が渾然と絡み合っている。

いよいよその当日、熱い想いと虫のいい甘美なふやけた意識とは、朝、現実の情け容赦のない寒さ、叔父の観念を裏切る行動 — いつになく帽子に念入りにブラシをかけようとする叔父はどこへ行こうとしていたのだろうか — によって冷水を浴びせかけられる。夕食に家に帰ってきてまだ叔父が帰ってきていないことを知り、時間を持てあました「少年」は、誰もいない2階へ上り、引用部(D)に至る。冷たいガラス窓を通して、子供たちの遊ぶ声が聞こえてくるが、しかしそれはもう過去のもののように弱々しく臆に聞こえるばかりとなっている。「少年」は窓ガラスに額を押し当て「少女」の家を見つめる。“I may have stood there for an hour” と言っているから、長い時間、まるで無時間の世界にいるかのように茫然としていたのであろう、目の前には、ただ光に照らし出された「少女」のうなじの曲線、手すりの上に置かれた手、そしてスカートの下に見えた白い縁が浮かんでいるだけであった。

引用部(C)で「少年」を捉えた「少女」の魅力は、時間の篩にかけられ、「少年」が最も惹かれた部分を残していると考えてもよいはずだが、その中に下着の縁が含まれていることは「少年」の「少女」への想いの中に、性的な関心が重きをなしていることを裏づけている。さらに引用部(C)において既に顕著であるが、「少年」の視線が捉えた「少女」の像が、「邂逅」の変態性老人と相同の fetishism の気味を帯びていることは見逃してはならない。それは、変態性老人の場合と同じように、potency の弱い性の代償であって、先に見たママ似宗教性、女性的受動性と同じように、年上の女性に寄せる少年の「初恋」に自然なものと言えるかもしれない。しかしともかく、「少年」は完全に「袋小路」に誘い込まれ、いわば呆けた老人のような状態に陥っている。

換言すれば、「少年」の恋は、ある意味でここにその終局を迎えているということである。読者は、引用部(C)と引用部(D)を比較して、前者に在った生気が後者では失せ、その

「聖母崇拜」にしても、平板なアイコン崇拜のような不活性なものに墮しているのに気づくであろう。「少年」の恋は、「少女」が「少年」に話しかけ、そのあらわな姿態を自分にだけ曝してくれた時点でその極点に達し、以後、その顕現の映像は、記憶の中で反復される度に、映像自身として固化し、再び生身の「少女」と重なる可能性のない、またこれ以上発展しようもないものに変じている。その証拠に、バザーに出かけた時から悲惨な失望に終わるまで、「少女」は一度も言及されないままで終わる。「少年」の「少女」に対する夢の精気はいつの間にか “Araby” へとすり換えられ、誇大に膨れ上がった幻想は、出かけた第一歩から何一つ現実にその相応物を見いだせない。しぼんだ夢の形骸だけが、かろうじて「少年」を目的地に運ぶが、全てが死んでしまっていることを「少年」は自覚するのである。

「アラビー」において、金銭の問題は重要なモチーフとなっている。「少年」は、死んだ神父が慈善心の篤い神父であったと言う。それは遺言によって財産の全てを諸施設に寄贈し、家具類だけ妹（ないし姉）に遺したことによって窺える。しかし、諸施設に寄贈しているからには、それは決して少額ではなかったはずで、清貧を旨とする聖職者が、どうしてそのような蓄財ができたのであろうかという疑問は当然湧いてくる。清貧の生活を送りつつ、なけなしの手当てを貯めて、最後に大きな慈善行為を行ったのであろうか。しかしそうした陰徳の聖者像は、自転車や、*The Memoirs of Vidocq* という物的証拠が喚起する生活のイメージとは必ずしも協和しない。

神父には、一人の妹（ないし姉）がいるが、「姉妹たち」におけるように、神父と同居していたとは考えにくい。（同居していれば、“he had left ... the furniture of his house to his sister.” というような表現にはならなかったはずである。）すると、後に出てくる記述からして、決して部屋数の少なくない家に、神父は一人で住んでいたということになる。fashionable な自転車を乗り回す生活は、がらんとした家とは調和しない。部屋には居心地よく調度がつらえられていたに相違ない。（そうでなければ遺産として特記するには価しないだろう。）こうした面から見ても、神父の生活は決して貧しいものとは言えず、果たして「少年」の言う、“charitable” という形容にふさわしい人物であったかどうか、猜疑心は澱のように残る。

神父は死に、葬儀の後、その財産は諸施設に分配され、家具類は妹の家に運び去られ、茶色の家は、建てられた時のようながらんとした状態になる。もし生前から、神父にある程度の財産があることが知られていて、彼が不治の病に冒され、余命幾許もないという状況に陥り、人々が神父が死んだ後のことを考え始めたと思定すると、諸施設は、様々な期待をし始めることだろう。あるいは、言葉にならぬ思いが様々なつてを経て、喘いでいる神父の枕頭にもたらされたかもしれない。神父であれば、経営に苦しんでいる孤児院、救貧院、病院、それに教区の教会を助けるのはその責務の一部とも言える、生きている時は

かりでなく、死ぬ時まで人のために尽くせるのはある意味で神父冥利とも言えるものだ、神父といえども俗世の罪業からは得てして逃れられないもので、多くの聖職者が、没後その恥を明るみに出されたが、いまわの時の功德は来世の救いを白日の如く確実なものにするのである... 神父はすでに濁り始めた脳髓で、他人の思考であるか、自分の思考であるか、あるいかどこか遠い世界から響いてくる声であるかはっきりとしなくなったものに弱々しく頷き、震える手でペンを取る — 神父は、恐らく、“back drawing-room”で夜ひっそりと息を引き取ったのであろう。

「少女」は何故「少年」に話しかけたのか、その仔細は分からないが、「少女」が「静修」がなければ、そこへ行って、何かを、茶色い服に身を包んでいても銀の bracelet をするくらいであれば、何かの装身具を買ったのかもしれない。「少年」は、“It’s well for you.”という「少女」の言葉に対して、“If I go, I will bring you something.”と反射的に答えているが、考えてみれば、「少年」のこの言葉が、その後の運命をある意味で決しているといってもよい — 「少年」はただでさえ込み入った精神の問題に俗世の金銭の問題を絡めてしまったのである。「少年」に金銭的な蓄えがないことは、全てを叔父に依存していることで分かる。土曜日にバザーに行く了承は、事前にとってあったが、土曜日の朝それを再び叔父に念押ししているのは、無論、行くための金を忘れないでほしい、という意味に他ならない。その晩、夕食が半ば過ぎてやっと「少年」はそのことを叔父に持ち出しているが、それは金銭の問題がいかにか口ににくかったかを物語っている。「少年」がもらったのは1フロリン銀貨(2シリング=24ペンス)で、それは少年がもらう小遣いの額としては決して少ないものではない。入場料に1シリング(12ペンス)払って、最後の場面で、「少年」は、握り締めていた2ペンスをポケットの底の半シリング(6ペンス)硬貨に落としているから、残金は8ペンス、つまり汽車賃は差引4ペンスだったということになる。帰りの汽車賃4ペンスは取っておかなければならないから、余裕を見ておけば、半シリング硬貨は残しておいて、残り2ペンスが「少女」への贈り物が買える予算ということになる。「少年」が2ペンスを握り締めていたのにはそういう計算が働いていたに相違ない。しかし2ペンスでは、「少年」が立ち寄った店の壺もティーセットも買えないであろう。バザー会場に入った時からの「少年」の無気力な様子は、自分の想像していた“Araby”がどこにも見当たらないこと、自分の心がすっかり空虚になっていることに気がつき始めたことを表しているのだろうが、それはこうした金銭的な無力さによっても増幅させられているはずである。最後の、“driven and derided by vanity”という言葉には、Mammonにたぶらかされ、嘲笑された人間の苦い意識が籠められている。「少年」は“Araby”に行くのだと、酔った叔父に2度までも、自分の大切にしていた神秘の言葉を(金のために)安っぽく売らねばならなかった。すると叔父は、お前は“The Arab’s Farewell to his Steed”という詩を聞いたことがあるかと尋ねる。それ

は、“Araby”という言葉が、叔母には Freemason を、叔父には感傷的な詩しか喚起することしかできないというダブリンの「大人」の鈍麻した想像力に対する皮肉になっているが、この詩の内容が、金銭のために愛馬を売ってしまった男が、最後に自分の過ちに気づき、金をたたきつけて愛馬を取り戻すというものであれば、叔父の朗唱は一種の dramatic irony として、バザーに出かける「少年」の背中に痛烈な嘲笑を浴びせかけていることになる。バザーの会場の、イリュミネーション・ランプの下で、金の勘定をしている男たちには、エルサレムの神殿に入っていたイエスがそこで売り買いをしている者たちを追い出し、両替商の台、鳩売りの椅子を覆したという事跡⁶⁾が意識されていると一般的に評釈されているが、確かに色のついた光りを浴びながら、金盆に硬貨を落としている姿には、人間の物欲の卑しさ、精神のあえかな夢を萎縮させてしまうような毒々しさが感じられる。しかし最後の場面で、「少年」が握り締めていた2枚の1ペンス硬貨を半シリング硬貨に落とした時、文章には書かれていない音を読者は聞くことができる。その音は、読者の脳裡において、金を数えていた男たちの、金盆に硬貨が落ちる音に共鳴し、するとそれをclueにするかのように、さっと闇が天井を覆うことになる。そして銀貨の放つ光は、遠く「少女」の銀の bracelet に通い、この世の誰も金銭の柵に縛り上げられていることをもの悲しく思い出させてくれるようだ。

バザーに行く前、薄暗い2階に上がって、長い間窓ガラスに額を押し当てて「少女」の姿を眼前に浮かべていた「少年」には、どこか一面で May Day の朝、まだ日の昇らぬ前の野に出て行き、草の葉に置かれた露で顔を洗う少女のようなひたむきな可憐さを感じられる。そして階下に降りてきて、最初に見た女性が、質屋 (Mercer は mercenary に通ずる) の寡婦で、古切手を慈善事業のために集めている Mrs Mercer である。高い利子を取って生計を立てておいて古切手を慈善に収集するという念の入った piety、夜の空気は健康に悪いからといって帰っていく萎縮した侘しげな姿には、「少女」が幾許かの光陰を経た後にたどり着く — 銀の bracelet と茶色の服は彼女を否応なくそこへ連れていくであろう — vision が啓示されていると考えてもおかしくない。

「少女」は果たして「少年」を好きだったのであろうか。「少女」が銀の bracelet をくるくると回す仕草は、バザーの会場の “lady” が、壺の位置を少し弄って男たちのところへ帰っていく仕草と似通ったものを感じさせる。その後、彼女は首を曲げて「少年」の方に何度か視線をやるが、その眼差しはどんな眼差しであったことだろう。豚の頬肉の詰まった樽の番をすること — 市場の原理は最終的にはそこに帰着する。

「アラビー」には、「落ちていく」(fall)というもう一つの大きな、そして統合的なモチーフがある。⁷⁾柔らかく萌え出でた春の若葉もやがては枯れて地に落ちるように、光は闇に、音は静寂に、運動は静止に、物質的拡張は空虚へと結局は帰していく。それは要約すれば、「生」が「死」に向かって常に落下していることを思い出させるよすがであり、

「情熱」は、よしそれが恋愛上のものであれ、宗教的なものであれ、やがては冷めて「虚無」へと吸収されていく。閉じかけたバザーに「少年」が感じた静寂は、祭りの後の寂寥であり、それは礼拝の後の寂寥と同質のものである。最後にバザーの会場を覆う闇は、黙示録的な vision をすら感じさせる。

引用部(C)をよく見てみると、「少年」の視線が上から下へと動いているが、それは光自体の落下運動とも重なっていることが分かるであろう。本来質量を持たず地上の原理には従わぬはずの光が、恰も引力に引きずられるかのように、麻痺したように、けだるそうに「少女」の身体の突出した部分にぶつかり、発光しながら落ちていっている。最後に照らし出したのが、下着の縁であったというのも、恋愛の行き着く先の奈落を顕現しているのかもしれない。

引用部(E)を見てみよう。店番の“lady”と2人の“gentlemen”のイギリス風 accent を持った — 実際に彼らがイギリス人なのか、イギリス風 accent を気取って使うアイルランド人なのかは不分明 — 会話は、東洋の魅惑どころか、アイルランドを牛耳るイギリスと繋がった人間が、興をそぐような中身の無い — そして繰り返されていることから「麻痺」の症状を呈した — 会話としての機能を果たしている。内容は“lady”があることを言った、いや言わないの押し問答に過ぎない。しかし彼らは、笑いながら話しているのだから、言い争っているわけではなく、むしろ興がって話しているのである。恐らく紳士の一方、ないし両者は、この女性に関心を懐き、彼女の方もそれを憎からず思っている様子に見える。彼女が「少年」に向けた無愛想な表情には、それを妨げられた不快さが含まれている。店がひけた後、彼らはどこかに出かけようとしているのであろう。つまり、この脈絡においてみれば索漠とした会話も、彼らにとっては一種の求愛行動になっているのである。「大人」の「紳士・淑女」の恋愛 — それは、「少年」の恋がいつかは落ちてゆく“decency”を暗示している。“lady”は、最後の“O, there's a ... fib.”で言い淀んでいる。それは、“lie”という言葉を避けて、他の“decent”な表現を捜したがためである。しかし、彼女が陰に隠したその言葉にはもう一つの意味があって、⁽⁸⁾それは“decent”な恋愛がやがてたどり着く先を顕現しているであろう。

こうした落下は、西洋風に言えば、言うまでもなく人間の墮落(fall)をその源としている。「少年」の眼を通して描かれたダブリンの人々の生の営みが、“ugly monotonous child's play”と映るのは、恋に目の眩んだ「少年」の傲慢には違いないが、それはまた、恋に目の眩んだ人間にしか持てない洞察をも含んでいよう。不活性な淀んだ空気が呪われた人間を侵していく — Christian Brothers' School から吐き出される腕白盛りの学童たちは通りの静寂をしばし破るが、しかしやがてその学童たちのどの血管にも、この静かな空気の毒は回っていくに違いない。(Mrs Mercer の言葉は正しかったのだ。)その意味で、「アラビー」の冒頭に置かれた2つの paragraph は、物語全体の雰囲気秘か

に支配している。袋小路の North Richmond Street の行き止まりにある 2 階建ての空虚な屋敷は、この通りを — 神父の家を含めて — 宰領しているようで、神父の家に籠っている淀んだ空気は、その空き家にはさらに重く淀んでいることであろう。物語はここから始まり、やはり闇と空虚に支配されようとしているバザーの会場で終わっている。

「アラビー」は先述したように、聖杯探究の冒険物語の parody としての要素を若干持っており、その視点で見れば、最後に行き着いた壺やティーセットが「聖杯」のイメージを持っているかもしれないが、しかし 20 世紀の騎士は金銭でそれを購わなければならないのであり「少年」はそれに失敗している。それは、最初に大切に抱えて守っていた chalice を無事に運ぶことができなかった、「少年」はそれをどこかで壊してしまったという暗喩を伴う。すると chalice を壊してしまったことから凄じいまでの麻痺症状を呈した「姉妹たち」の神父の物語がただちに読者の脳裏をかすめる。

引用部(B)の描写をよく読むと、そこに「姉妹たち」に流れていたのと同じような気味の悪いものが潜んでいることが感知されよう。暗い冷たい晩に降る雨の描写を読む読者は、天の雨と地の土が交わる官能性と共に、そこに死臭を嗅ぎ、死者たちが交合しあう密やかなざわめきを聞く。神父の死んだ部屋で行われる愛の神への祈りには、どこかに死霊との霊交が感じられ、それがあからこそ「少女」が唐突に話しかけてきたことを読者は不自然に感じないで済むのである。引用部(D)の冒頭で、冷たく、薄暗く、空虚な部屋を巡りながら「少年」は歌を歌っている。表面的には “Araby” にやっと思行けるといふ喜びが、一人きりになってようやく解放されて湧いてきたような書き方であるが、しかし隠された層では、「少年」が死の世界の elements に親和性を示し始めていることが語られていると推測される。⁹外で遊ぶ子供たちの声はもはや「少年」には alien なものとなっている。

「少年」の挫折は叔父が遅れたことが主因ではない。それは死んだ神父の遺した本に興味を示し、「少女」を日除けの陰から覗いていた最初から準備され、祈りを捧げた暗い晩に契約され、Mammon に魂を売って成就されたのである。読者は、最初に「少年」たちが遊んでいた夕暮れの紫色の空に向かって街灯が弱々しい光を掲げるといふ印象的な文章を思い出すかもしれない。それは、一面で、これから降臨してくる闇の神に対する人工の光による homage となっている。「少女」がその身体を曝したのは、この夜を照らす人工の光に対してであった。「少年」が人工の光りに照らし出された街を通り、バザーの会場へ出かけた時 (“The sight of the streets thronged with buyers and glaring with gas recalled to me the purpose of my journey.”)、そして、暗がりと静寂が広がり始めたバザーの会場に入った時 (“Remembering with difficulty why I had come...”)、「少年」は自分が何をしに出かけたのかを忘れてしている。それは、叔父が「少年」がバザーに行くことを 2 度も忘れたのと相似関係にあり、「少年」が orientation を失ってしまったこと、「麻痺」の渦に吞まれ始めたことを暗示している。

結末の引用部(F)は重層的な意味を響かせている。一つには、「初恋」を失って、「少年時代」というエデンの園を、原罪と恥辱とを背負って追放されていく人間の苦悩、一つには、神聖な愛の神殿を金銭で汚されたことに対する、イエスの怒りと通ずる噴怒、さらには、傲慢の罪により墮天使となったルシフェルを思わせる苦悩と敵意、またさらには、母を恋して自らの目を潰した Oedipus の呪咀等々。しかしここに Tenebrae の象徴を見る見解は、決して荒唐無稽とは言えないものを有していると思われる。「少年」がバザーに行った、叔母の言葉にある“night of Our Lord”が Holy Saturday 即ち、イエスが十字架にかけられ復活する前の土曜日を記念した日とするなら（それは「少女」の「静修」とも符合する）、この週、教会では Tenebrae の儀式が執り行われていたはずだからである。Tenebrae は “darkness” に相当するラテン語で、教会に点された15本の蠟燭を1本ずつ消していき、イエスの受難後に襲ってきた闇を記念する儀式である。すると、alliteration によって強い輪郭を与えられている「少年」の目に燃えている光は、何を象徴しているのだろうか。

もしジョイスが、この場面で Tenebrae を意識していたと仮定すると、ジョイスの脳裏には必ずや1903年4月10日の Good Friday の日、渡っていた先のパリの Notre-Dame 寺院で見た Tenebrae の儀式があったはずである。教会を出てパリの通りを長くさまよった後、夜遅くホテルに帰ってみると、“MOTHER DYING COME HOME FATHER”の電報が届いていた¹⁰ — それは、死の床に横たわる母親との宗教上のやりとりと共に、ジョイスの心に深い痕跡を残したに相違ない。

「アラビー」は、安易な感傷や理想化を拒み、隠された暗部を容赦なく暴き出す峻烈な批評精神を持って書かれた少年期の「初恋」物語である。そこには、醜いもの、不気味なものも偽善を許さず書き込まれているという点で、「姉妹たち」「邂逅」と軌を一にしている。そしてまた、「姉妹たち」の神父の胸に置かれた聖杯のように、変態性老人を見る「少年」の眼差しのように、「アラビー」においても、最後には、少なくとも人間的な、優しさが賦与されているように感じられる。それが、誰もが経験し、挫折し、そして結局冒涇しきれぬまま記憶の闇から呼び起こすことになる「初恋」のある本質に対して忠実さを保持し得ている鍵になっているのかもしれない。読者は、ふと自分の心に、死んだ神父のことがいつまでも蟠っているのを発見するであろう。「少年」の祈りは、死んだ神父によって不気味な効験を与えられていたが、しかし裏を返せば、「少年」の祈りは、ある暗夜に神父が祈った、孤独な、誰にも伝えられなかった祈り — 虚無と闇と静寂に葬られてしまった祈り — を蘇らせてくれてもいる。それが、この作品のどこかに感得される詩情に似たものを、一番奥底で支えていてくれるように思われるのである。

— 註 —

- (1) 永井荷風「夜半の酒場」（『あめりか物語』）に引用されたアメリカの俗謡。
- (2) Don Gifford, *Joyce Annotated: Notes for Dubliners and A Portrait of the Artist as a Young Man*, Second Edition, University of California Press, 1982, p.43.
- (3) テキストには、*Dubliners* (The Viking Press, 1968) を使用した。
- (4) 発表当時、例えばGerald Gouldは、“Araby”を“wonderful study of boyish affection and wounded pride”と評して、“The Dead”と共に、*Dubliners*の中の最も印象的な作品としている。Robert H. Deming (ed.), *James Joyce: The Critical Heritage, Volume One 1907-1927*, Routledge & Kegan Paul, 1970, p.63参照。
- (5) Warren Beck, *Joyce's Dubliners; Substance, Vision, and Art*, Duke University Press, 1969, p. 97.
- (6) “And Jesus went into the temple of God, and cast out all them that sold and bought in the temple, and overthrew the tables of the moneychangers, and the seats of them that sold doves, / And said unto them, it is written, My house shall be called the house of prayer; but ye have made it a den of thieves.” (Matthew 21: 12-13)
- (7) 実際に“fall”という言葉も何回か使用されている。それらを列挙しておく、① When the short days of winter came dusk *fell* before we have well eaten our dinners. ② The light from the lamp opposite our door caught the white curve of her neck, lit up her hair that rested there and, *falling*, lit up the hand upon the railing. It *fell* over one side of her dress and caught the white border of a petticoat③ I listened to the *fall* of the coins. ④ I allowed the two pennies to *fall* against the sixpence in my pocket. (Italics mine.) となる。
- (8) 例えば、“Therefore I lie with her, and she with me, / And in our faults by lies we flatter'd be.” (Shakespeare's Sonnet CXXXVIII)参照。
- (9) この部分に関しては、2階に上ることを、物質的世界から高次の精神界への上昇の象徴と見る解釈（例えば、Homer Obed Brown, *James Joyce's Early Fiction; The Biography of a Form*, The Press of Case Western Reserve University, 1972, p.29参照）もあり、ある程度の妥当性を持つが、それだけでは“cold empty gloomy”であることの必要性を説明しきれない。
- (10) Richard Ellmann, *James Joyce*, New and Revised Edition, Oxford University Press, 1982, p.128参照。